



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	20世紀初めのロシアにおける精神分析の運命：覚え書
Author(s)	国分, 充
Citation	東京学芸大学紀要. 第1部門, 教育科学, 56: 309-320
Issue Date	2005-03-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/2085
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

20世紀初めのロシアにおける精神分析の運命

— 覚え書 —

国分 充

発達障害学*

(2004年10月29日受理)

はじめに

本稿は、20世紀初めは1930年頃までのロシアで精神分析がたどった道ゆきを、1978年Sigmund Freud Haus BulletinにLobner と Levitinが書いた論文¹⁾に基本的に基づいて、一部ルリヤが1925年にInternationale Zeitschrift für ärztliche Psychoanalyseに載せた報告（以下、ルリヤのZeitschrift報告とする）等の関連論文によりながら、ラフ・スケッチすることである。このような古い論文に基づいて、こうしたテーマについて今改めてまとめておくことに意義があると考えたのは次のような理由による。第1には、筆者は、いわゆるヴィゴツキー学派の心理学思想の形成史に関心をもっている者であるが、精神分析は、ヴィゴツキー、ルリヤらに大きな影響を及ぼしていると考えられること。第2には、しかし、一方、精神分析は、ソビエト・ロシアでは禁じられた学説であり²⁾、それゆえ、(ソビエト・ロシアのゴルバチョフ書記長時代のグラスノスチ以降の研究者の多大なる努力及び研究の進展³⁾ はみられるものの) かの国における精神分析の歴史は、特にわが国では、よく知られるには至っていないと思われること、第3は、Lobnerらの論文は、グラスノスチ以前にロシアの精神分析の歴史を記述した(後にも引用する)カロテヌート(1991)の本においても、主に依拠している文献で(筆者は彼の本によりLobnerらの論文を知った)、それゆえ、基準となる「古典的」論文ではないかと思ったこと、第4には、Lobnerらの論文は、その掲載雑誌はわが国に所蔵はなく、その意味で比較的珍しいものと筆者には思われたこと、以上の4つである。

- 1) 著者の一人Lobnerは、オーストリア人のようであるが(Sigmund Freud Hausのスタッフと思われる)、一方のLevitinは、出国ロシア人(亡命かどうかはわからない)で自然科学者であるが、ロシアの精神分析事情に精通しており、その名Levitinは筆名であるとする。このような事情から、この二人の著者は、ともに英語が母語ではなく、二人のうちより英語力のあるLobnerが論文を執筆したと言う。論文の初めの部分に二人が論文を書くに至った事情が書かれているのであるが、筆者には今ひとつよく理解できないところがある。
- 2) 例えば、ショーロホフ(1975)のような精神分析・深層心理学批判。ソビエト・ロシア時代、筆者は、こうしたものから精神分析と(ソビエト・)マルクシズムとは全く両立しないものと、当然のごとく思っていた。
- 3) 本論文でも一部引くエトキント(1997)やOвчаренко(2000)等、その他Miller(1998)など。

1. 帝政末期(革命前)における精神分析の「興隆」⁴⁾

Lobnerらは、ロシアの精神分析の始まりを1908年3月13日のオデッサの軍医Pevnitsky⁵⁾のペテルブルグでの講演から書き始めているが、見るところ、実質的にはモスクワのOsipov(Nikolai Jefgrafovich)(1877-1934)⁶⁾から始まる。彼は、スイスで学び、ブローラー、ユングのいたブルクヘルツリ病院にも勤務し、1908年にはフロイトを訪ねたこともある精神科医であった。彼は、フロイトを訪ねた同年、モスクワの精神病院の助手となった。そして、Serbsky(Vladimir P.)教授(1858-1917)の助力の下、精神科医のサークルをつくるとともに、精神分析に係わる論文を当時の精神医学雑誌に発表する。また、1909年からは精神療法ライブラリを出版し、そのシリーズの中でフロイトの著書の翻訳を行なった⁷⁾。Osipovは、1910年には、再度フロイトを訪れ、フロイトは彼について聡明で信頼できる仲間という印象を抱いたという。

* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

精神分析の活動を支えた教授にはSerbskyの他にも一人おり、それはVyrubov 教授(1869-1918)である。彼は「精神療法 (サイコセラピヤ)」という雑誌を発行し (1909年)、その雑誌は1911年までには、精神分析のための雑誌のようになっていたという。また、彼は精神分析中央雑誌 (Zentralblatt für Psychoanalyse) にも論文をいくつか発表しているともいう。

次にLobnerらの論文に登場する重要人物は、Wulff (Moche.B.) (1878-1971)である。彼は、オデッサの出身であったが、ベルリンの精神分析サークルに参加し、アブラハムの下で訓練を受けたロシア人最初の正式の分析家であった。Wulffは、1909年にはオデッサに戻り、当地で出されていた医学雑誌に精神分析の論文を発表している。また、フロイトの著作の出版も行った (1912年)。彼に対するフロイトの評価は高く、後述のように第1次世界大戦でロシアの精神分析運動が中断した時代に、フロイトは、ロシアで精神分析理論を深く理解した熟達した分析家はオデッサのWulffのみであると述べているのである。オデッサは精神分析にとって重要な土地で、何よりもまずフロイトの母の育ったところであった。また、このWulffの他、ロシアの精神分析の発展にとって重要なもう一人の人物、医師 Leonid Drosnesの出身地でもあった。Drosnesはオデッサで有名であった精神科医の息子で、ロシア貴族の息子で神経症を病んでいた“狼男”を最初に診、フロイトに彼を紹介したのは彼であった。Drosnesは、1911年、ウィーンの協会のメンバーとなり、分析家として教育を受けた後、ペテルブルグへ移った。次に述べるロシア精神分析協会の設立を、フロイトが聞いたのは、このDrosnesからで、彼と面会したときだという。

こうして、1910年頃には既にロシアの精神分析は、モスクワ、オデッサ、ペテルブルグの3都市ではかなりの力を有するに至り、1911年にはOsipov, Vyrubov, Drosnesらによりロシア精神分析協会がつくられている。彼らの力は国際的にも認められており、1910年、第2回国際精神分析会議 (ニュルンベルグ) で前述の精神分析中央雑誌の創刊が決まったときに、その編集委員にはOsipovとWulffの2人が名を連ねている。また、OsipovやWulffの貢献により、1915年頃までにはフロイトの著作のほとんどはロシア語で利用できるようになっていた。こうして、Lobnerらは、(旧)ソビエト・ロシアの精神分析の研究者 (彼らはBassinの名を挙げている) が、革命前ロシアには、ロシア医学・神経生理学の確固たる伝統があったから精神分析が大きな影響を与えたことなどない、というのはまったくの嘘だとしている。

その他、Lobnerらの記述の中で、後の展開と関連して注目される事柄を挙げると以下のようなのである。

Sabina Spielrein (1885-1942)が1911年、1912年と彼女の故郷ロストフ・ナ・ドヌーで精神分析にかんする講義を行なっている。彼女はそもそもヒステリーを患い、1906年にユングの患者となった。彼女は、その後1911年ウィーンの協会のメンバーとなり、フロイト派の最初の女性分析家のひとりとなる。彼女のアイデアは、フロイトは当初嫌ったものの後の彼の「死の本能」概念に強い影響を与えた。先に記したカロテヌートの著書「秘密のシンメトリー」(1991)は、1977年ジュネーヴで発見された彼女の日記・手紙類によりながら彼女の足跡を記した著書である。彼女の生涯は、小説にもなっており、翻訳もされている (アルネス, 1999)。Spielreinが、ユングとの有名なスキャンダルを経て、フロイトに近づいたことは、カロテヌートの記すところである。

Spielreinとともに記憶されるべきもう一人のロシア女性がTatjana Rosenthal (1885-1921)で、彼女が1911年にペテルブルグに戻っている。彼女はペテルブルグの出身で、少女時代にはユダヤ社会民主党に加わるなどの政治活動もしていたが、その後チューリヒへ移り、そこで精神分析を知る。医学を学んだあと、ウィーンで訓練を受け、ペテルブルグに戻ったのであった。彼女がペテルブルグへ戻ることによって、これまでモスクワ、オデッサに比して相対的に弱い立場にあったペテルブルグの精神分析は強化されるとLobnerらはいふ。ここまでに登場したOsipov, Wulff, Drosnes, Spielrein, Rosenthalはいずれもウィーンの協会のメンバーであった。これは、出身地に精神分析の組織がないが、フロイトとのつながりを深めた分析家についてはメンバーとして歓迎するという協会の伝統によるものだそうである。

その他、Lobnerらの記述で記憶されてもよいと思われることには、初期精神分析サークルのメンバーの一人にFeltsmanがいて、彼は、フロイトの夢判断のレビューを出し、精神分析を多少試みたが、後には精神分析に対するロシアで最初の敵対者になったこと、当時出版されていた精神分析にかんする著書には後の児童学を中心とするZalkindのものもあること、精神分析を支持するさらなる教授としてKannabikhがいること、すでにフロイト派だけでなく、アドラー派の者も現れていること (Bierstein)、大学の教員を兼ねていたSerbskyとOsipov (講師) が当局との対立で大学を退き、Serbskyの後を襲ったのはErmakov (1875-1942)であったが、彼もまた精神分析派であったこと、等である。

- 4) 以下の叙述における時期区分は筆者が適当なまとまりを考えて行っているもので、Lobnerらによるものではない。
- 5) 本論文中に出てくる人名については、フロイトやヴィゴツキーなどわが国でもよく知られているものについてはカタカナで表わすが、そうではない場合は参照した論文で用いられている表記をそのまま用いることを原則としていたが、それによりわかりにくくなると考えられる場合はそうしなかった。
- 6) 生年没年について、OsipovとWulffについては、Lobnerらの論文に書かれていたが、それ以外の重要な人物については、Oвчаренко(2000)を見て、それに記載ある場合はそれによった。しかし、この本にある事実の記述とLobnerらの記述との異同の確認は、今回は行わない。ロシア人の名前、父称については、Oвчаренко(2000)にはそれも載っているのであるが、本論文ではLobnerらに記載のあったもののみ記す。
- 7) Lobnerらの論文及びルリヤのZeitschrift報告には、フロイトの著作のロシア語版がいつ出たかがいくつか記されている。本稿末の付表にはそれをまとめてある。適宜参照されたい。

2. 第1次世界大戦・革命内戦期の精神分析の「中断」

第1次世界大戦というヨーロッパを舞台とした初の近代総力戦の経験が、戦争神経症の治療等、フロイトおよび精神分析理論に大きく影響したことはよく知られているが、しかし、ロシアにはそうした影響はなかったとLobnerらはいいい、先に述べたVyrubov教授により発行され、精神分析のための雑誌のようになっていたという雑誌「精神療法」は1916年ないし1917年に途絶えたという。ルリヤのZeitschrift報告でも大戦中はそれまでかなり高まっていた精神分析の関心は下火になり、再度盛り上がりを見せたのは革命後としている。大戦期から革命内戦期の主要人物の動向は、Lobnerらによると、まず、Serbskyは、革命時に死去、Osipovは1920年にプラハに去り、Wulffはこの時期モスクワにいて、1919年第2モスクワ大学の講師になる。Spielreinは1919年ローザンヌへ赴き、そこで精神分析サークル(Circle interne)をつくる。Rosenthalは革命時にはペテログラードにいたというものである。

3. ソビエト・ロシアにおける精神分析の「再興」

革命後(内戦終息期以降)の出来事として、Lobnerらの記述で注目されるのは、1922年、カザンで社会科学協会からカザン精神分析協会ができたことである。このグループの事務局長はルリヤで、7人の医師、2人の教師(教育学者)、5人の心理学者、1人の作家、そして、有名なKrasnikov教授も含まれていた。翻訳出版活動(主力メンバーAverbukhのフロイト翻訳)等を行ったが、メンバーのうち3名(ルリヤ、Averbukh, Friedmann)がモスクワに移り(1923年頃)、協会は消

滅した。しかし、会がなくなってからも出版活動は続いた。ルリヤのZeitschrift報告では、メンバーのうちの2,3人はチューリヒで学んだことがあったとしている。ルリヤが精神分析へいかに傾倒していたかは、自伝にも描かれている(Luria, 1979, P.24)。それによると、20歳の時に、生まれ故郷たるカザンで精神分析サークルを結成し、ロシア語とドイツ語でKazan Psychoanalytic Associationというレターヘッドの入った便箋をつくり、その便箋でフロイトその人にサークル結成を知らせ、フロイトから、“Dear Mr. President”と呼びかける返事をもらって狂喜したという(なんと早熟な知性か！)。

一方、ロシア精神分析協会は、革命後再度結成され、Lobnerらはこれを「第2次ロシア精神分析協会」と呼んでいる。この第2次協会は、まず、1921年、芸術創造性の研究会としてつくられた。代表はErmakovで、こうした会の代表を彼がとめていることは、精神分析にかんする彼の関心の基本的方向を示している。この研究会は政府から特別な援助を受けていたとLobnerらはいいい。メンバーには、美学および哲学の教授が含まれ、教育人民委員部を代表する人物(Weinberg)も含まれていた。また、数学教授として、Schmidt(後に登場するVera Schmidtの夫で、著名な自然科学者である)が入っており、彼は政府出版所の責任者でもあった。1922年、この会がロシア精神分析協会となる。事務局長はWulffであった。Schmidtは、国際精神分析学会代表アブラハムと接触し、フロイトは、条件が整えば正式メンバーに迎えよと述べたという。ルリヤのZeitschrift報告によると⁸⁾、このロシアの協会は、後にベルリンの協会に編入されたようである。

Lobnerらは、協会は、3つの部門に分かれていたとする。ルリヤのZeitschrift報告も以下に記すのとほぼ同じ内容の3部門のことを記している。1つめが、芸術と文学の心理学部門で、Ermakovが中心であった。2つめは、Lobnerらが重要視している臨床分析部門であった。Wulffが統括し、彼のほか、Spielreinが協会の訓練分析家であった(1923年まで)。3つめは教育応用にかんする部門であった。それは後に述べる子どもの家実験室の仕事を中心とするもので、当時主導的な教育学者Shatsky教授の援助を受けることになっていた。この部門のしていたことは第1次世界大戦後のウィーンで行われていたこととよく似ており、それは教師(pedagogues)コースがあったというところまで同じであった。さらに、ここでは、児童学者(pedologues)コースという専門ブランチが新たににつくられ、訓練がなされた。当時の教育学者(1926年のGriboedovの論

文)の言として「精神分析なしで犯罪の研究を行うのは、章のタイトルだけあって中身がないようなものだ」をLobnerらは引いている⁹⁾。児童学者 (pedologues)の最後のコースは1926/1927年に開かれたという。

この協会を担ったErmakovとWulffは、ソビエト政府出版所の精神分析関係出版物特別部門をも任い(1922年)、多くの精神分析関連文献を発行した。これには叢書や集成というべきものが含まれており、また、当時発表されたフロイトの著作の翻訳はきわめて迅速になされており、例えば、フロイトの「自我とイド」は1923年に出たものであるが、1924年には翻訳して出されている。Lobnerらの記しているこうしたことは、精神分析にたいする当時のロシアの関心の高さを表しているといえる。ところで、こうした出版事業が革命後のソビエト・ロシアでなされていることは、革命前とは全く異なる意味をもつものとして注意すべきであろう。というのは、ソビエト政府は、革命後当初から、独特の出版観により、出版の自由を否定していたからである(浅岡, 2003)。こうした中で精神分析関係の出版が可能であったこと及び協会には政府出版所の責任者 (Schmidt) も含まれていたことには、Lobnerらがいのように、革命政府の精神分析に対する特別な態度が反映されていると見ることができる。

さらに、Lobnerらは、ErmakovとWulffが、国立の精神分析研究所を1922年につくることに成功したことを記し、当初それは、後に述べる子どもの家実験室と共同であった。その後、Wulffの下で、精神分析診療所も開設する。このロシアの国立精神分析研究所は、ウィーン、ベルリンに続く世界で3つめの訓練・治療センターで、1924年には研究所は10のセミナーを開催し、大学と診療を支えたという。ルリヤのZeitschrift報告も、この国立精神分析研究所のことを記し、それは子どもの家から始まったとする。また、精神分析研究所で精神分析の講義が催され、その講義では医師と教師とに精神分析の基本問題をわかりやすく伝えることが試みられたこともルリヤは記している。一方、ロシアの精神分析史家エトキント(1997)は、この研究所の学術書記はルリヤであったとし、所長はErmakovで、Spielreinが所員であったことを記している。Spielreinの消息等については、エトキントの記すところでは、彼女は、1923年に帰国し、ロシア精神分析協会の会員となる(ルリヤも同時期に会員になる)。また、同じ年にこの研究所の所員となり、また、ロシア精神分析協会委員会5人のメンバーの一人になった。彼女は、同年9月の要員アンケートに答えて、①国立精神分析学研究所所員、②第3インターナショナル記念施設医

師兼育児学者、③第1モスクワ大学児童心理学科主任の3つの場所で働いているとし、自らの職業は「精神科医、医師兼育児学者」としているそうである。1924年1月までは研究所の所員で、1924年末か25年にロストフへ戻った。研究所は1925年8月に閉鎖された、とエトキントはいう。彼は、Spielreinがピアジェに精神分析を教えるとともに、ヴィゴツキーにも影響を与えたことを示唆している。ピアジェについては、それは真実のようであるが(ピアジェ自身が認めているようである)、ヴィゴツキーへの影響は、ロシア心理学史の大家Ярошевскийがあり得ないと強く否定するところである(Ярошевский, 1996)。Ярошевскийは、エトキントが欧米ではよく知られていたもののロシアでは知られていなかったSpielreinをロシアで知らしめたその功績は認めるものの、エトキントはヴィゴツキーの著書をまともに読んでいないと厳しく批判する。Ярошевскийは、ヴィゴツキーへの精神分析の影響全般を認めないようであるが、しかし、この彼にしても、エトキントを痛罵したその同じ論文でフロイトの「快樂原則の彼岸」のロシア語版にヴィゴツキーが序文を書き(これはエトキントも触れていることである)、そこには精神分析への決して低くはない評価(フロイトの考えは唯物論的とまで述べている)が見られることは紹介している。

以上、このようにみえてくると、ソビエト・ロシアの初期(内戦終息以降から前スターリン期)、すなわち、ソビエト・ロシアの20年代には、欧米諸国に劣らぬ精神分析が存在していたということは間違いないといえよう。

さて、ここで、既に出てきた子どもの家実験室についてまとめておく。まずLobnerらによると、それは、1921年に国立の施設としてできたもので、ErmakovとWulffの監督下、活動したのは、Vera Schmidt (1889-1937)で、先に出てきたSchmidtの妻であった。彼女の活動は、フロイトの影響のもとで行われたオーストリアのAichholn (Oberhollabrunn) やBernfeld (Kinderheim Baumgarten)¹⁰⁾らの非行少年に対する著名な実験をまねたもので、それは精神分析の枠組みにうまく収まるものであった(共産主義のイデオロギーにも適合するものであったろうとLobnerらはいう)。1924年にはその活動の報告も出されている。Schmidtはこの施設のために苦闘し、性的虐待などの噂が立ち、調査がなされて支援者が離れる等ということもあったが、鉱山労働者組合が食物と石炭を援助し、助けた。1922年、国立精神分析研究所ができた後は先に述べたように共同して活動した。ルリヤのZeitschrift報告によると、当

時のロシアでは教育はきわめて大きな意義を有していると考えられていたため、この施設の活動は多大な関心を集めていた。実験室の課題は、子どもの行動の発達形態についてデータを得ることで、環境条件すべてを変えることや、研究に基づく教育システムを試すことも許されていたという。実際、2から5歳の子ども10名程度を、1.5から2年預かり、実験室が存続した3年間にわたり、システムティックな観察がなされ、子どもの性的機能および社会性の発達等について多大なデータがとられたともされる。この仕事の一部は、「ソビエトの精神分析的な教育」として出版された（これが上でLobnerらの言う報告か？）。しかし、集積されたデータの大部分ははまだ実験室の文書室に残されたままになっているとルリヤはいう。さて、Lobnerらの記述には、同様の試みがペテログラードでもなされていたと判断されるものがある。Rosenthalは1905年には、ペテルブルグにいて、全女子学生の長をつとめたりしていたが、1917年革命時にはペテログラードで詩集などをつくっていた。その後、ペテログラード脳病理研究所附属精神神経症診療所で、戦争神経症の研究を行うようになり、1920年には、「ドストエフスキーの病いとその文学」という論文を書いたり、8月には子どものためのケア会議に参加したりしていた。そうするうち、教育人民委員部はペテログラードに精神障害（神経精神病的）の子どものための施設をつくることにし、彼女に運営を任せた。しかし、彼女は、1921年に自殺してしまう。これにより、ペテログラードの精神分析運動は消滅し、Drosnesはオデッサへ帰還するに至る。

- 8) 年号等、細かな点では、ルリヤの記述とLobnerらの記述には齟齬のあるところもある。しかし、本稿ではその指摘は行わず別の機会に譲りたい。
- 9) 同様の引用を、エレンベルガー(1980)は1925年のルリヤの「一元論的心理学体系としての精神分析学（「心理学とマルクス主義」所収）」の言として次のように紹介している（下巻、P.502）。「精神分析学なき犯罪研究は内容なき章の標題にすぎない」
- 10) AichholnのOberhollabrunnでの実験について、エレンベルガー(1980)によれば、それは1918年から1919年にかけて行われたもので、第1次世界大戦後の惨状の中での青少年の情緒的健康を守るための英雄的な努力のひとつに位置づけられている。Aichholnは、ウィーンの公立小学校の教師で、オーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊したとき、荒廃した崩壊家庭の出身の非行少年および攻撃的な少年等、教育困難児の担任になった。敗戦や革命煽動、暴動を経験した彼らに治療教育を試み、彼らの攻撃性が収まり立ち直っていく過程に立合った。そのいきさつはまとめられて、1925年に「非行少年」という著書として発表された。彼は精神分析の訓練を受けており、その書

物にはフロイトの序文がついており、問題全体は精神的に解釈されているという（下巻、P.486, 502）。一方、BernfeldのKinderheim Baumgartenでの実践については、今のところ筆者には不明である。

4. ソビエト・ロシアにおける精神分析の「衰亡」

Lobnerらは精神分析のイデオロギー的意義が論じられ始めたのは、1922年9月から、ルリヤによるという。ルリヤは、1923年にはカザンの集会で、精神分析とマルクス主義は、分析的である、無意識を扱う、人格全体を含む、ダイナミズムを研究する等の点が共通していると述べた。この問題は、ルリヤの他、Rohr, Friedmannが編者となった論文集「精神分析とマルクス主義」で詳しく論じられ、その頃には、精神分析は、科学をマルクス主義にしたがって展開するのにふさわしいと見られていた。1923年の第1回全ロシア精神神経学会議では、精神分析家による9つの講義も行われている。しかし、批判はまずペヒテレフからなされた（1924年）。ポリシェヴィキのリーダーたちの態度はというと、レーニンは関心さなかつたが、トロツキーはきわめて深い関心を示した¹¹⁾。レーニンの死から1年後、1925年3人のマルクス主義者が公に精神分析批判を開始する。Jurinetz, Talheimer, Deborinである。Lobnerらは、何ゆえ、精神分析がバプロフ学説より生物学的とされ、また、イデアリズム、シニシズム、保守的ブルジョア世界観などと批判されたのかわからないという。Jurinetzは「戦う唯物論者」や「マルクス主義の旗の下に」といった雑誌に精神分析批判の論文を書き、また、1925年にはプレスハウスと共産主義アカデミーの2箇所での精神分析批判の講演を行った。こうして状況は明らかに変化してきた。精神分析支持者の中には、3つの立場が生じた。ひとつは、精神分析とマルクス主義は支え合い、同じ部類に属するものだとする見解（ルリヤ, Vnukov, Reussner）、反射学と精神分析は矛盾しないとしてイデオロギー問題を避けるもの（Perepel, Friedmann）、相容れないことを認めるものの共通の敵たる宗教には共同して立ち向かえるというものである（Averbukh, Kannabikh）。こうした中、Zalkindは精神分析から撤退し、ルリヤのいうところの“Adlerian reflexologist”になっていた。

ルリヤのZeitschrift報告は、こうした論争についてやや詳しく記している。Lobnerらと重複するところもあるが、彼らよりも詳細な情報および異なる点も含まれているので以下に見てみよう。ルリヤは、精神分析の哲学的・学問的基礎について広範な議論が起こっているとし、一方には、精神分析は方法として、純粋に

科学的な、つまり自然科学的な、唯物論的な基礎に依存していると考え、また、精神分析は全く一元的システムで、それは、そのダイナミックな、かつ一部は弁証法的な見地によって特徴づけることができると考えるグループがあり、彼自身はこのグループに属する。そうした立場からの論文は1924年にいくつか公表されており、次のようなものがある。ルリヤ「一元論的心理学体系としての精神分析学」、Friedmann「フロイトの精神分析と史的唯物論」、2つの論文集「心理学とマルクス主義」、論文集として出された「精神分析と唯物論」(ルリヤ, Wulff, Friedmann, Rohruらの論文)等。こうした考え方のグループに対し、もう一方には、精神分析にたいして原理的な点から敵対する者たちがいる。彼らは、精神分析は観念論的前提を有しており、その理論の中心は唯物論とほとんど関係がなく、そのメタ心理学は形而上学と合体していると主張する。その主唱者は、Jurinetzで、彼は、哲学者で、自然科学的素養はまったくない。彼が雑誌「マルクス主義の旗の下に」に論文を載せ、そこからこの論争が始まった。彼を支持するのは、有名な芸術理論家Fritsche教授である。1925年早々、2つの討論会があった。1つ目は、モスクワのプレスハウスで、精神分析とマルクス主義について行われ、2つ目は共産主義アカデミーで、精神分析と芸術心理学について行われた。1つ目の討論会は、2夜にわたって行われ、多くの聴衆が集まった。Jurinetzが精神分析に反対し¹²⁾、精神分析の側には一連の研究者、すなわちロシア精神分析協会会員の主たる面々、ルリヤ, Wulff, Reisner, Charasow, Rohr, Salkind, Schaffiz, Friedmann, Wnukowがついた。この討論会以後、ロシア精神分析家には、当初よりの賛同者の他、新たな2,3の立場が生じてきた。ひとつは、精神分析を修正して受け入れる者で、もうひとつは、精神分析を独特な方向へ新しく構築しようとする者である。最初のタイプの学者としてルリヤが挙げるのは、Reisner教授(有名なロシア法学者・社会学者)で、彼は宗教心理学的研究では、精神分析を全面的に受け入れているが、しかし、精神分析のなかのメタ心理学などの新しい理論は、初期の精神分析の考え方からの逸脱であり、唯物論哲学と両立することは困難であるとする。もうひとつのタイプの学者として彼が挙げるのは、Salkindで、彼は、ダイナミックでアクティブな立場の精神分析においては、人と精神とはそれぞれの目標を目指して葛藤する統一体であるという認識こそがもっとも重要で、精神分析的な性理論やリビド理論は必要ない、人間の生活においてもっとも重要な欲動は、社会的な欲動であり、また、力への欲動と考

える。ルリヤは、Salkindは“アドラー流反射学”があると信じているとし、彼は、精神分析体系全体を客観的生理学・反射学のことばへ移し変えようと苦労している、そして、ロシアには、パブロフに代表されるような客観心理学的(あるいは生理学的)学派の影響がきわめて大きいため、そうした客観学派の研究と精神分析とを結びつけようとする傾向があり、実際、2,3の心理学者と精神分析家はすでにこの方向での仕事を開始しているとしている。

ルリヤのZeitschrift報告は1925年に発表されたものであるが、当時の精神分析のロシアでの状態について次のように記している。基本的には精神分析の歴史における他の国の状況と全く異ならない、2,3の公共病院では精神分析も患者の治療法として徐々に他の方法と同等に受け入れられてきているが、アカデミックな精神医学は精神分析にはかなり冷淡で、対立してきた。主要な精神病院の中には、機能的ノイローゼと取り組んでいるところもあり、そこでは精神療法の手法がかなり広範に用いられている。例えば、モスクワの心理精神神経研究所には特別外来診療所がつくられており、そこでは精神分析の手法も用いられている。レニングラードには今や精神療法のための特別の研究所が存在し、そこでは精神分析とともに催眠療法も、また、“道徳治療(Rationelle Therapie)”も受けられるようになっていると述べている。また、オデッサ、キエフなどの都市でも、2,3の医師が精神分析に従事しているが、しかし、こうしたところでは、運動の発展が見られると言うことはできない。ロシアの精神分析運動が発展できるかどうかそれは今後にかかっているとして報告を終えている。

さて、Lobnerらの記述にもどると、1927年2月23日、フロイトはプラハのOsipovへ次のように書いている。「ロシアの分析家は厳しい状況にある。ポリシェヴィキは精神分析が彼らのシステムに敵対するものといつかからか考えるようになっていく。われわれの科学は、いかなる党からも便宜を受けないが、しかし、ある種の自由は発展のために必要だ。こうした状況のなかで、Ermakovは精神分析にたいする情熱をなくしてしまうのではないかと、もしかすると、もはや撤退しているかもしれない」まさしく、1927年、Ermakovは協会代表を退く。代わってWulffが任命され、ルリヤが事務局長となるが、事務局長は、さらにV. Schmidtに交代する¹³⁾。1928年、Wulffは代表を辞めるとともにベルリンへ去る(彼はその後1933年パレスチナに移住)。Wulffの後には、Kannabikhがつとめることになった。会員数は1928年がピークで30名、その後3年間のうちに

22名に減ったという。Lobnerらはロシアの精神分析はこういう状況に陥ったが、しかし、研究がまったくなくなってしまうわけではなかったとする。1928年にはWulffのストリート・ドライバーの研究が発表され、神経学的な検査がなされるとともに、患者の不安については、精神分析的な説明がなされていた。その他、Koganの分裂病者のエディプス幻想についての研究が1928年に発表されているという。著者のひとりLevitinは、20年代末の精神分析をめぐるうって変わった雰囲気や次のようにいう。彼は20年代のフロイト関連の多くの本を読んでいたが、それには、編者Ermakovの熱い序文、すなわち、フロイトは偉大だ、革命的だ、死んでも歴史に残る、妥協しないで孤立を守る等等など、実験的な知識ではないものの患者との格闘の中から生まれたものであり、Ermakov自身フロイトの正しさを確認したということ等などがついていて、20年代の終わりに出されたフロイトの「幻想の未来」では、そもそもの初めから精神分析の役割はあいまいだったと述べ、ブルジョア的生活様式に役立つものであったと述べていたという。こうした精神分析とマルクス主義をめぐる議論は、1929年にピークを迎え、その最中にライヒがソビエトを訪れるということがあったという。ライヒが語ることとして、Lobnerらが伝えるのは、彼が訪れたモスクワ神経病理学研究所のRosenstein講師の部局には、フロイトの写真のかかった分析治療室があり、モスクワやマルクス・レーニン研究所の若い医師は精神分析を、セクシャル・カウンセリングや、予防医学関連等に用いていたというものである。1930年に最後のロシア精神分析協会紀要が出され¹⁴⁾、それには1930年2月17日のセッションでのFriedmannの報告（「第1回全同盟心理学会議における精神分析批判について」）の短評が載っている。アイティンゴンは、1933年、「ロシアからはここ数年ニュースは届いていない」と精神分析学会報告の中で記しているそうである。なお、エトキント（1997）は、1929年にヴィゴツキーがロシア精神分析協会の会員になったと記しているが、ちょっと遅すぎるようにも思う。

11) Lobnerらは以下のように記している。1923年9月23日、トロツキーはバブロフに手紙を書き、次のように述べている。「ウィーンにいたとき、フロイディアンと親しくし、彼らの本を読み、また、集会にも参加した。」また、Lobnerらはトロツキーの精神分析の評価として次のような言葉を紹介している。「精神分析は、フロイトの巧みな方法により、詩人が人の魂と呼ぶ泉を露わにした。何が見えてきたか？われわれの意識的思考というのは、暗い心的な力の働きの微粒子にすぎないということだ。」佐々木（1997）によると（佐々木、P. 439）、トロツキーが

バブロフに手紙を書いたのは、精神分析を誠実に検討するよう説得するためであった。また、佐々木が言うように（佐々木、P.440）、トロツキーはアドラーの患者であった友人ヨッフェを通して精神分析に関する知識を得たようである（トロツキー、2000、P.428）。ユダヤ人にして、社会主義者でもあったアルフレッド・アドラーの補償を中心とする学説にヴィゴツキーが大いに共鳴していることは、彼の心理学思想を考える上では記憶しておきたい（ヴィゴツキー、1982参照）。また、トロツキーとヴィゴツキーとの思想的なつながりはエトキント及び佐々木（1997）の示唆するところである（エトキントはアドラーとのつながりも指摘している：佐々木、P.308, 441）。

12) 精神分析批判の講演で、Jurinetzがいかなることを話したのかは、にわかにはわからないのであるが、安田一郎はドイツ語版「マルクス主義の旗の下に」の彼の論文（Jurinetz, W. (1925) Psychoanalyse und Marxismus. Unter dem Banner des Marxismus, Bd.1, Heft 1)を訳している（ユリネツ、W. 他、1971）。訳者たる安田一郎は、本のまえがきで、ユリネツの精神分析に対する理解には正しくない点があり、また、彼の叙述の仕方は簡潔で、詩的でよくわからない点もあるが、精神分析にかんして今日問題として挙げられる点が指摘されているとする。Lobnerらは、心理学とマルクス主義に関する議論は大きな主題として彼らの論文の範囲外であるとして深く触れていないが、筆者は力不足ゆえにこの問題には触れ得ないが、ユリネツの論文を読んで、彼の精神分析に対する批判は、心的因果論への批判、後期フロイトの自我心理学的側面と前期無意識学説との理論上の不整合あるいは未整備、また、社会・歴史理論への無際限とも思えるエディプス・コンプレックス等の精神分析概念の拡張等を衝くものと感じられたが、彼の非難の口調はきわめて激烈で、フロイト（学派）の落ち度として彼が取り上げている事柄に対して、一寸不釣合いではないかという印象をもった。しかし、訳者安田一郎の父、戦前の日本ファシズムに果敢に立ち向かった安田徳太郎は、（安田一郎が同書の訳編者のまえがきの中で戦前（1932年）発禁となったライヒ、ザビアの翻訳「フロイト主義と弁証法的唯物論」（植田正雄訳）の徳太郎の書いた序文を紹介しているのだが、それを見ると、）ユリネツのこの論文をその当時よく見られた精神分析に対する単なる揶揄ではなく、マルクス主義からの理論的批判として、高く評価し、尊敬の念さえ表明している。なお、訳者安田一郎は、ユリネツのことを、その名がロシア人らしくないせい（また、翻訳原本がドイツ語版の「マルクス主義の旗の下に」であったせい）か、ナチスを逃れた亡命ドイツ人でスターリン期に粛清された人物と見ているが、Oвчаренко(2000)によると、Юринетц(Владимир, Александрович)(1891-1937)は、ペンスキー大学で哲学及び物理数学を学び、パリで哲学博士学位を取得。モスクワ赤色教授アカデミーで学び、1922年からはウクライナのハリコフの研究所につとめていたが、1936年逮捕され、収容所で死亡、死後名誉回復とある。彼は、モスクワ赤色教授アカデミーの出身とされているが（1921年修了）、やはりその出身であった哲学者ミーチンは、30歳そこそこにしてデボーリンらを厳しく批判し、「ボルシェヴィキ化推進」を唱えて、スターリニズムを称揚した。1920年後期ロシアのこの「知的正統性」の確立（バーバー、1996：佐々木、1997、pp.245-246）ということ、おそらくロシアの精神分析の運命にもかかわる興味

深いことと思われる。

- 13) ルリヤの自伝の編集者であるコールも、1927年にルリヤは精神分析に係わる活動から身を引いたとしている (Luria, 1979, P.211)。ちなみに、中井(1990)は、天才的精神分析学者として知られ、1927年に突然姿を消した人物ルリヤが、ソビエト・ロシアでよく知られた神経心理学者ルリヤとが、同一人物であると知ったときの当時のアメリカの研究者の驚きを記している (中井, 1990, P.20)。
- 14) こうしてソビエト・ロシアでは、精神分析は1920年代末に消滅したとされ (エレンベルガー, 1980, 下巻, P.507: 中井, 1982, P.211)、カロテヌートは、精神分析は (1923年とも1936年とも矛盾した記述をしているが、とにかく) 「非合法化された」とする (カロテヌート, 1991, P.335, 351)。

5. ソビエト・ロシアにおける精神分析の「禁止」

Lobner らの記述はその後、その当時は、必ずしも政府から好ましく見られていなかったパブロフ¹⁵⁾やベヒテレフの学派が官許の学となり、1950年のパブロフ会議を頂点とする精神医学の性急なパブロフ化とでも呼ぶべき状況を描くのであるが、その中で興味深く思われるのは、いわゆる児童学批判の意義づけである。Lobnerらは、児童学批判を精神分析批判と関連させ、それをソビエト政府が児童学のみならず精神分析をも反政府的なものと決定的な烙印を押したものと見ている。すなわち、Lobnerらは、Wortisの“Soviet Psychiatry”という1950年の成書¹⁶⁾の記述を引き、1936年の中央委員会決定「教育人民委員部における児童学的偏向」には、翻訳には多少ゆがみがあると留保しながら、大意として次のような声明があるとする。「ソビエト心理学は、意識は、心理発達において、最も高次の、人間に特有のレベルのものであるという理論を断固として支持する。そして、意識の影響は、無意識のそれに比して優勢であると考える。」そして、この決定で、精神分析への賛同を表明する者は、反革命の相続者、スパイ、破壊者、サボタージュ、資本家の手先として指弾されるべき者の候補者として、いつまでも記憶されるようになったという。つまり、Lobnerらは、精神分析がソビエト・ロシアにとって許されざる学説であることを決定的にした出来事が、児童学批判だと見ているようなのである。いま上で引用したような文言に対応することがらが、いわゆる児童学批判に明確にあるなら、Lobnerらのいうことも理解できなくはないが、しかし、今われわれが知り得るものとその内容はかなり異なっているといわざるを得ない。この点は確認を要することではある。

なお、いわゆる児童学批判のときに同時に対象とされたのが、精神技術学である。その精神技術学を代表するソビエトの学者がIssac Spielreinで、Sabina Spielrein

の弟であった。彼は、1931年、モスクワで開かれた第7回国際精神技術学会議の際にはその議長をつとめている。エトキント(1997)によると、ヴィゴツキーは、Issac Spielreinが議長をつとめる適性測定心理学 (エトキント論文の邦訳ではこう訳されているが、精神技術学のことと思われる) 協会の副議長であったそうである。ロシアの心理学史家ペトロフスキーによると、Issac Spielreinは、国際会議を行ったのと同じ年に深刻な自己批判を行っているようであるが (ペトロフスキー, 1969, P.344, 346)、1935年に逮捕され、1937年末銃殺されている (1957年名誉回復) (逮捕以降のことはКурек, 2004による)。結局、精神技術学は児童学と同一の運命をたどる。ペトロフスキーは、ソビエト・ロシア期の1967年に心理学史を書いているのであるが、Issac Spielreinにかなり同情的で、この精神技術学批判には否定的である。

この後のLobnerらの記述は、ソビエト・ロシアという「社会主義」独裁国家が正義を名乗る中で、精神医学の果たしている (きた) 役割を問い糾しながら、精神分析的 (もっとひろく力動精神医学的というべきか) な治療の試みを拾い上げていくという論述となっている。ここより先の彼らの記述は、本稿冒頭に述べたような筆者の現在の関心からは離れるため本稿はここで終えることとしたい。

15) パブロフが10月革命および革命政府に対し、反対の態度を表明していたことは当時からよく知られていた。また、レーニンおよび革命政府が彼を破格に扱ったことも知られている (デイビス, 1998, pp.336-338)。この間の事情は松野 (2004) に詳しい。

16) 彼らが引いたのは、Wortis, Joseph (1950) Soviet Psychiatry. Baltimoreである。

まとめ

以上、ここまで見てきたことをまとめよう。ロシアでは、20世紀初め、帝政末期にすでに精神分析はかなり受容されており、精神分析協会が設立され、フロイトの著作の翻訳も進んでいた。第1次世界大戦期及び革命から内戦期には、精神分析運動は一時途絶えるものの、内戦後再度精神分析は力を得、ソビエト政府の支持の下、精神分析協会が再結成され、1920年代には欧米に劣らぬ大きな発展が見られた。国立の研究所もつくられ、その活動は、子どもの教育・発達等の問題と強く結びついていた。しかし、20年代半ばから反ソビエト・反マルクシズムという批判が高まり、結局1920年代末に消滅する。こうした精神分析のたどった道ゆきは、この後登場する児童学及び精神技術学の運

命を先取りしているかのようなのである。そして、精神分析と児童学・精神技術学に係わる重要人物の何人かは重複していたり、関係したりしている。

本稿末には、Lobnerらの記述の主たる点を年表にまとめ、エレンベルガー (1980)¹⁷⁾のロシアにかかわる記述を書き抜いたものとともに示した。これらは、おおむね符合していると見ることができ、エレンベルガーの記述の的確さには、それが書かれた当時 (原著1970) の資料の乏しさ等の限界を考え合わせると、筆者には評する資格はないと知りつつも、ただ感服するばかりである。また、Lobnerら及びルリヤのZeitschrift報告に載っていたフロイト著作のロシアでの出版年も、年表としてまとめ付した。これらには、異なるところもあるのであるが、その整合はとらず、どちらも記述されているとおりまとめたものである。

17) エレンベルガー (1980) の「第10章力動精神医学の台頭と発展」下巻, pp.395-553

文献

- 1) アルネス, K. (藤原優子訳)(1999)「ザビーナ」. NHK出版 [原著1994]
- 2) 浅岡善治 (2003) ポリシェヴィズムと「出版の自由」-初期ソヴィエト出版政策の諸相-. 思想, No.952 (2003年 8 月), pp.32-61.
- 3) バーバー, J. (湯川順夫訳) (1996) ソ連邦における知的正統性の確立-1928-1934年-. 思想, No.863 (1996年 4 月), pp.99-124.
- 4) デイビス, R. W. (内田健二・中嶋毅訳)(1998)「現代ロシアの歴史論争」. 岩波書店 [原著1997]
- 5) エレンベルガー, A. (木村敏・中井久夫監訳)(1980)「無意識の発見(上・下)」. 弘文堂 [原著1970]
- 6) エトキント, A. (武田昭文訳) (1997) 文芸学者ヴィゴツキー-忘れられたテキストと知られざるコンテキスト-. 現代思想, 25-4, pp.214-241 [原著1995]
- 7) カロテヌート, A. (入江良平訳)(1991)「秘密のシンメトリー」. みすず書房 [原著1980]
- 8) Lobner, H., Levitin, V. (1978) A short account of Freudism- Note on the history of psychoanalysis in the USSR-. Sigmund Freud Haus Bulletin, pp.5-30.
- 9) Luria, A. (1925) Psychoanalytische Bewegung-Die Psychoanalyse in Rußland. Internationale Zeitschrift für ärztliche Psychoanalyse, 11, pp.395-398.
- 10) Luria, A. R. (1979) The making of mind - a personal account of soviet psychology (eds. Cole, M. and Cole, S.). Harvard Univ. Press
- 11) Miller, M. A. (1998) Freud and the Bolsheviks. Yale Univ. Press.
- 12) 松野豊(2004)バヴロフの社会的・政治的信条-バヴロフ-モロトフ往復書簡から. 唯物論と現代, 34, 2004年12月, pp. 85-99. 文理閣
- 13) 中井久夫 (1982) 第三章西欧精神医学背景史. 「分裂病と人類」. 東京大学出版会, pp.89-244所収
- 14) 中井久夫 (1990) 「治療文化論」. 岩波書店
- 15) ベトロフスキー, A. B. (木村正一訳)(1969)「ソビエト心理学史」. 三一書房 [原著1967]
- 16) 佐々木力 (1997)「マルクス主義科学論」. みすず書房
- 17) ショーロホフ, E. V. (斎藤良夫訳) (1975) 第3部深層心理学 「現代心理学批判(アンツィフェーロフ, L. I., ショーロホフ, E. V.著)」, 中央大学出版部, pp.123-179所収 [原著独訳1969, 露原著1963]
- 18) トロツキー, L. (森田成也訳)(2000)「わが生涯(上)」. 岩波書店 [原著1930]
- 19) ヴィゴツキー, L. S. (大井清吉・菅田洋一郎監訳)(1982) 欠陥と超補償. 「ヴィゴツキー障害児発達論集」, ぶどう社, pp.91-125所収 [原著1927]
- 20) ユリネツ, W. 他(安田一郎訳)(1971)「フロイトとマルクス」. 誠信書房 露語
- 21) Курек, Н. С. (2004) История ликвидации педологии и психотехники в СССР. Алетеия (黒田直実私訳)
- 22) Овчаренко, В. И. (2000) Российские психоаналитики. Академический проект
- 23) Ярошевский, М. Г. (1996) Когда Л.С.Выготский и его школа появились в психологии. Вопросы психологии, 5, стр.110-121. (黒田直実私訳)

付記

香川大学教育学部教授黒田直実学兄には、多年にわたり、興味深い露語文献の私訳を見せて頂いております。心から感謝申し上げます。

恩師東北大学名誉教授松野豊先生には、貴重な文献をお貸し頂くとともに、種々の訳稿をお見せいただきました。先生の学恩にあらためて御礼申し上げます。

Rough Sketch of the Doom of Psychoanalysis in Russia in the Early 20th Century

Mitsuru KOKUBUN

*Education and Developmental Science for Individuals with Special Needs**

The development of psychoanalysis in Russia was traced during the early part of the 20 century, mainly based on the study of Lobner and Levitin (1978), supplemented with the reports of Luria (1925) and others. Before the Revolution (in the closing days of Tsarist Russia), psychoanalysis had already been fairly well received. The first psychoanalytic society was organized in 1909. The movement of psychoanalysis in Russia was briefly interrupted by the 1st World War and the Revolution. Following the civil war caused by the Revolution, the psychoanalytic movement in Soviet Russia again became active and much more influential. The psychoanalytic society was re-organized with considerable governmental support and a national institute was established in 1922. The institute was deeply concerned with the problems of education and child development. But by in the middle of the 1920s, psychoanalysis came under severe criticism because of its anti-Marxism, and by the end of the 20s psychoanalysis in Soviet Russia had disappeared.

References

- 1) Lobner, H. and Levitin, V. (1978) A short account of Freudism-Note on the history of psychoanalysis in the USSR-. Sigmund Freud Haus Bulletin, pp.5-30.
- 2) Luria, A. (1925) Psychoanalytische Bewegung-Die Psychoanalyse in Rußland. Internationale Zeitschrift für ärztliche Psychoanalyse, 11, pp.395-398

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

国分：20世紀初めのロシアにおける精神分析の運命

年表（Lobnerらの主たる記述をまとめるとともに、エレンベルガー(1980)に見られる記述を書き抜いたもの）

年号	Lobnerらの主な記述（一部エトキントより）	エレンベルガーのロシアについての記述
1908年	Pevnitskyのペテルブルグ講演: Osipov ロシアで病院助手に: 精神療法ライブラリ発刊	
1909年	「精神療法」発刊(Vyrubov): Wulff オデッサ帰還: ロシア精神分析協会結成: Spielrein ロストフ・ナ・ドヌーで講義(1912年も): Rosenthal ペテルブルグ帰還	
1911年	Drosnes ペテルブルグへ	
1914年		精神分析大衆化し主要著作は翻訳済み
1916-1917年	「精神療法」途絶える: Serbsky 死去(1917年)	
1919-1920年	Wulff 第2モスクワ大学講師に: Spielrein ローザンヌへ: Osipov プラハに去る	
1921年	芸術創造性研究会結成: 子どもの家開設: Rosenthal 自殺: Drosnes オデッサに帰る	戦争および革命中に停止状態であった精神分析運動再開: モスクワのグループはまもなくたいへんに繁栄
1922年	ロシア精神分析協会結成(ErmakovとWulffにより芸術創造性研究会から): カザン精神分析協会結成(ルリヤ): 国立精神分析研究所開設(ErmakovとWulff)	精神分析はロシアで広まる: Ermakovがフロイト翻訳全集で小児性欲を教育者にとって必須と称賛
1923年	Spielrein 帰国しロシア精神分析協会会員に(エトキントによる): ルリヤ カザン協会でイデオロギー論争を始める	
1924年	Spielrein ロストフ・ナ・ドヌーへ帰る(エトキントによる)	議論が起こり続く
1925年	Jurinetz 精神分析批判講演 国立精神分析研究所閉鎖(エトキントによる)	フロイト初期著作の再版と新著作の翻訳なされる: ルリヤの「一元論的心理学体系としての精神分析学」論文発表: 精神分析はロシア知識人での大問題のひとつ
1926年	最後の児童学コースの開催(1927年まで)	ロシアで精神分析運動頂点に達するも西欧には知られず
1927年	Ermakov ロシア精神分析協会代表降り後任はWulff, 事務局長はWulffからルリヤへ(後にSchmidtへ)	パブロフが実験神経症から臨床神経症へ関心もつ: パブロフが胆石手術から心臓神経症になり後に論文化
1928年	Wulff ロシア精神分析協会代表辞任し後任はKannabikh	ここ1, 2年間ロシアの精神分析はにわかに消滅と記しエレンベルガーは「なぜかわからない」と評する
1929年	ライヒの訪ソ: Vygotsky ロシア精神分析協会会員へ(エトキントによる)	
1930年	ロシア精神分析協会の最後の紀要が出る	
1936年	児童学批判	
1945年		ソビエト・ロシアではパブロフ精神医学が公式学説になり精神分析は禁止状態

付表 (Lobnerら及びルリヤの Zeitschrift 報告にあったフロイト著作物のロシアでの出版年)

年号	Lobnerらの挙げるフロイト関連著作の出版	ルリヤの挙げるフロイト関連出版物
1909年	精神療法ライブラリ発刊(モスクワ, Osipovによる):「精神分析学5講」(精神療法ライブラリ, 2版目1912, 3版目1913):「性学説3論文」(Osipovによる)	1908-1909年 Felzmann, Ossipov, Wyrubowによるロシア最初の精神分析出版物が出る
1910年	「夢について」(Osipov, ペテルブルグで2版目1912)	1910-1912年 精神療法叢書出版, フロイト「性学説3論文」「精神分析について」「夢について」「5歳児の恐怖症」含まれる: オデッサのWulff, やはり精神分析叢書出版, フロイト「W. ジェンセン“グラディーバ”における妄想と夢」が含まれる
1912年	「W. ジェンセン“グラディーバ”における妄想と夢」(オデッサ):「レオナルド」(モスクワ, ここより1913年までのものは, Osipov, Wulff, ErmakovによるとLobnerらはいふ):「精神分析学5講」(Osipovによる, モスクワ):「5歳児の恐怖症」(モスクワ):「心理過程の諸原理」(雑誌「精神療法」上に, モスクワ)	
1913年	「夢解釈」(モスクワ):「分析における夢の解釈」:「分析のマネジメントについての医学的アドバイス」:「神経症のタイプ」:「精神分析における無意識の概念」	「夢解釈」
1920年	「トーテムとタブー」(モスクワ・ペテログラード):「集団心理学と自我分析」(Averbukhによる, カザン)	
1922-1923年	ロシア精神分析ライブラリ発刊(ErmakovとWulffによる, 政府印刷所から):「精神分析入門2巻」(モスクワ, ロシア精神分析ライブラリ, 初版2000部即完売):「心理学理論概説」:「精神分析の方法と技術」:「性格のタイプ論集」(Byeloussovによる):「トーテムとタブー」:「性の心理学」:「子どもの精神分析論集」(以上, 1922年) 「集団心理学と自我分析」(Averbukhの翻訳, 1923年)	1923年頃 心理学および精神分析叢書(Ermakovにより, 国営出版所から出版, 訳はほとんどWulff), 最初の2巻はフロイト「精神分析入門」, 3巻目はフロイト「心理学論文選(無意識について, 抑圧について, 欲動とその運命, 心的行為の2つの原理等)」, 4巻目は精神分析の技術と方法に関するフロイトの論文, 5巻目は精神分析的な性格学のフロイトの論文
1924年	「自我とイド」(レニングラード, フロイト原著は1923)	「自己とイド」(ルリヤ, Rohr, Friedmannら“精神分析とマルクシズム”)
1925年	「日常生活の精神病理」(改版):「集団心理学と自我分析」(モスクワ):「快樂原則の彼岸」(モスクワ):「機知と無意識の関連」(モスクワ): (1922年から1925年までのものについては, ほとんどはWulffが訳者, Ermakovが編者であるとLobnerらはいふ):「精神分析研究集成」(オデッサ, フロイト関連かは必ずしも明らかでない)	「集団心理学と自我分析」:「快樂原則の彼岸」:「機知について」
1920年代末	「幻想の未来」	